

「戦争と医学」展と 国際シンポジウム「戦争と医の倫理」



●滋賀医科大学教授

西山 勝夫 にしやま かつお

開催までの経緯

2007年3月31日から4月8日まで、第27回日本医学会総会が大阪で開かれた。日本医学会は1902年に創立され、戦後日本医師会に再編された。同会は、日本を代表する組織として世界医師会へ加盟するために、1949年の代議員会で声明を出したものの、日本の医学者・医師自身が日本の侵略戦争に加担し、残虐な医学犯罪などを行ったことについて、公式な検証や反省を全くせずに21世紀を迎えた。

一昨年大阪で開催された保団連医療研究集会における特別企画（国際シンポジウム）「医師・医学者の戦争責任を考える—関東軍731部隊をめぐって」を担った医師が主体となり、その償いを日本医学会自身に求める「戦争と医学」展実行委員会を昨年7月に発足した。会は、全国に協力を呼びかけると共に、医学会総会の企画展示実行委員会委員長や岸本総会会頭を訪問し、日本の医の倫理の原点と切り離せない日本医学会の戦争加担の問題に日

本医学会が公式に取り組むべきであると要請し、粘り強く折衝しながら準備をした。

今年1月末、ようやく届いた医学会総会側からの返事は、展示場の片隅に畳2枚位の掲示板の38万円での貸与に留まったが、医学会総会企画の一部となった。この展示とは別会場のたかつガーデンで4月6日～8日の展示と4月8日の国際シンポジウム「戦争と医の倫理」が独自に催されることとなり、120枚のパネルからなる展示には延べ600人余の来場者があり、最終日の国際シンポジウムには約300人の参加があった。

シンポジウムは午後1時、大阪市立大学土屋准教授の司会で、実行委員長の主催者挨拶に始まった。指定発言では三重県の元731部隊衛生伍長の意を決した衝撃的証言があった。討論後、医学者・医師の戦争加担についての公式の検証と反省を日本医学会に要請する2007年大阪「戦争と医学」展の宣言が山口現代医療を考える会代表から訴え



司会の
土屋貴志氏

られ、保団連住江会長の挨拶で午後5時に閉会した。

経緯、宣言は『大阪保険医雑誌』2007年8月号に譲り、本稿では、国際シンポジウムの内容を中心に振り返りたい。

731部隊等の被害国国民として

最初のシンポジストは、元731部隊の遺跡に設けられた侵華日軍731部隊罪証陳列館の王鵬館長であった。王氏は、731部隊による人体実験、生体解剖の具体例をあげ、「被害国の国民として、731部隊が侵略戦争のため残忍非道の限りを尽くし、大量の生きた人間を使い人体実験をしたと知った時、誰もが憤怒で胸が一杯になる」と述べた後「被害国の国民として医の倫理をどのように考えるか」を以下のように講演した。

中国にも多くの医学の先達が、疾病治療の方法を探るため自分の身体を使い実験をした。これら先達は、自身の高潔な品性で人類の健康のために心を砕き探求した。これは731部隊のやり方と180度違う。731部隊の人体実験では、①被験者は様々な残忍な実験方法で傷つけられ、最終的に殺された。②研究目的は細菌兵器を製造し、細菌戦をすることであった。③完全な強制で、合法かどうか、被験者が望んでいるかどうか等を全く考慮しなかった。④必死で隠し、永久に知られないように望んだ。

私たちは人体実験に反対ではないが、それは、①医学、全人類の幸福のため、②本人の同意が必須、③倫理道德の遵守という原則の上のみ成り立つと考える。それ以外に、どのような医学という錦の御旗を掲げた人体実



王鵬氏

験も不道德である。これらをないがしろにして人体実験を語るのは731部隊と同じ轍を踏み、さらに多くの無実の人がごく一部の集団の利益のために尊い命を失うことになる。

「後に厄介ごととに遭遇する」というリスクについて—アメリカ人の視点からみた731部隊の戦後史

次のシンポジストは、WHO上級研究員や国際生命倫理学会会長などを歴任にしたウィクラーク・ハーバード大学公衆衛生学教授で、米国の市民の立場から講演した。



ウィクラーク氏

「たしかに、後になってひどく厄介なことになるかもしれない。しかし、ここから得られる情報、とりわけ細菌戦の人体に対する影響に関して日本人から最終的に得られるだろう情報は、後の厄介ごとというリスクを負うだけの重要性をもつ、とわれわれは強く信じる」という国務陸軍海軍三省調整委員会の軍人の言葉（1947年）を引用して、「終戦直後に米国の731部隊関係者の戦犯訴追の放棄や金と引き換えに、同部隊の実験データを独占入手したことが、実際に次世代の大きな重荷になり、できる限り隠蔽してきたが、その結果、年を経るにつれて、より多くの重荷を負う結果になっている。米国民も日本と同じような重荷を背負ってしまった」と基調を述べ、以下のように続けた。

なぜ米国はナチスの科学者を死刑に処し、日本の科学者にはお金を支払ったか、実はドイツにおいても米国の方針は一貫していなかった。記録からは当時、731部隊の科学者と取り引きをした米国の役人は、道德的問題を

意識していたとは全く見受けられない。

今 731 部隊を論ずるのは、①蛮行の犠牲者を慮る義務を我々は有する、②同様の蛮行を繰り返さない、繰り返されないようにする、③なぜこのような大きなスケールの蛮行が譴責を逃れることができたか、④なぜ良心ある人々が沈黙を守ったか、⑤蛮行がなされてしまった後どうするかを考えねばならない。いまだこれらについて十分な答えがない。

731 部隊が注目に値するのは、それが「非常に残虐だ」からだけではない。同時に、その医学研究は日本人以外の人々に対してのみ行われた、その医学研究は国家の有事、戦時の中で行われた、という点にある。

残されている問題として、①国家安全保障や国家の有事を理由に正当化される研究とは、②外国人、特に戦時における敵国の戦闘員や市民をいかに扱い、配慮すべきか、③人間が研究に用いられる際に、例外なく常に守るべき行動の規準とは、④過失に伴う説明責任として何が維持されるべきか。どのような人が、過失に対する個人責任を否定することを許されるか。命令を実行した場合でもなお過失を理由に課される罰とは、⑤不正な医学研究を避けるために整備すべき国際的な制裁・職務上の制裁とは、が挙げられる。

米国人が過去の悪行ということでもまず思い浮かべるのは奴隷制である。奴隷制廃止は 1860 年代であるが、悪行として認められるようになったのは、ごく最近である。見たくない事実を直視することは、自分たちが守りたい価値を確認することに繋がる。より大事なことは、若い世代をそのような隠蔽への協力や隠蔽の責任の重荷から解放することである

う。その意味で、過去を直視することを恐れずこのような会を催した人々は、最高の名誉と尊敬を世界の人々から得るであろう。

「15 年戦争中の医学犯罪」と今日の私たちの課題

3 番目のシンポジストとして 蒔昭三・15 年戦争と日本の医学医療研究会名誉幹事長が日本の医師の立場から、以下の点について講演した。その内容は、実行委員会でも何度も検討され、蒔氏のみならず実行委員会の結晶ともいえる。



蒔氏

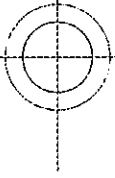
①日本の政府および医学界の「医学犯罪」等へのこれまでの対応について、②一部の医学者は「731 部隊」等とどのように関わっていたか、当時、「特殊研究」は知らなかったか？③命令や指示による「生体実験」「手術演習」、その実施した人の責任は問われないか、④「731 部隊」関係者の「免責」は、戦後の医学界にどのような影響を与えたかを示し、今、求められているのは、①「戦時中の医学犯罪」等について改めて政府として調査すること、②日本の医学界として、「戦時中の医学犯罪」等が事実として存在したことを確認し、今日の「医療倫理」の確立への教訓とすることである。

元 731 部隊衛生伍長 大川福松氏の証言



大川氏

大川氏は、1940 (昭和 15) 年に陸軍衛生部に入隊、北安陸軍病院に配属され、3 カ月の訓練後すぐ病理試験室に属し、動物に菌を接種し、その結果を観察



すると共に各中隊の兵隊の喀痰・検便・尿の定期的検査をした。慰安婦がどの部隊にも30人から50人いて、梅毒などの検査を土日の前にしていた。ペニシリン開発研究が契機で、1944(昭和19)年に731部隊に配属された。「見るな、言うな、聞くな」という3訓があり大変な所に来たと思った。凍傷、菌を投与した人体を解剖し標本を採り、標本瓶に入れた。これは日常3体行った。ロシア人、中国人、朝鮮人、刑罰を受けた日本人などと分かるが、名前は分からなかった。

初めは気分が悪かったが、何日かやっていると、毎日2、3体解剖しないと仕事が終わらないような気に段々なってきた、多い時は5体くらい解剖した。吉村班等と一緒にになって、採血した血液で培養したものを孵卵器に入れて増菌もした。もっといろいろ悲惨なことがあった。子持ちの慰安婦を解剖する時などは、親の死後、その子は凍らしてしまい、塹壕に放り込み埋められた。

私は、戦争犯罪人だが、軍歴を抹消されてしまっていた。情けないのは、今まで「あんたが731部隊にいたのなら2人の証人を出せ」と言われて、1人では認めてくれない厚生省・行政だ。



大川さんに続いての指定発言では、源進職業病管理財団の朴賢緒理事長が「この場で終わるのではなくて、日本各地でもこのような催しを。ぜひ韓国でも」と熱く述べ、731部隊細菌戦国家賠償請求訴訟弁護団の一瀬敬一郎弁護士が裁判の経緯について述べた後、自由討論が行われた。

4年後は日本医学会自身で過去の検証と反省を

実行委員会は、準備を進めるにつれて、解き明かせない、不十分なことがまだまだたくさんあることや、日本の医学医療を代表する組織である日本医師会・日本医学会が公式に、組織的に、過去に真摯に向き合うことの重要性を改めて認識した。海外のシンポジストや多くの参加者から、今回の取り組みに対する称賛がなされたが、日本の医学犯罪の犠牲になられた方々のことを想起すると、喜んではいけない。大川さんの話では、マルタの中には日本人もいたという。

4月22日に開催された第10回実行委員会では、シンポジウム後の王鵬氏の各地歴訪、大川福松氏訪問聞き取り調査、ドイツの医学部・医科大学に対するアンケートなどの報告も踏まえて総括の討議がなされた。そして、実行委員会の活動をこの日をもって一応の区切りとし、計画的に全国から集まる会議等は終了するが、次回、東京開催の日本医学会総会にふさわしい体制づくりに努力する、その体制のめどがたつまでは、当実行委員会の体制を存続させ、引継ぎや出版などに当たることで衆議一致した。

5月末には、第27回日本医学会総会名(事務局から)で、「戦争と医学」展実行委員会委員長および武田事務局長宛に「御礼状」が届いた。

今回の企画が新たな出発点になって、4年後、東京で開催される第28回日本医学会総会が公式に、かつての戦争加担に真摯に向き合う企画をする動きをさらに進めるものとなることを切望したい。